



## ： 卷 頭 言 ：

### 絵どころはないけれど・・・

三井化学アグロ(株) 代表取締役社長 金井健彦

私は昔から絵を描くのが下手だった。かてて加えて全くの運動音痴でもある。どうやら物心もつかない頃に手術をし、運動神経を取ってしまったらしい(?)。だが自分の弱点を挙げているなら、いくら紙面があっても足りないの、今日は絵の話だけにしておこう。

絵を描くのが決して嫌いな訳ではない。むしろ好きな方なのだが、とにかく画用紙を前に思い描いたすばらしい構想に対し、出来上がった作品は見るも無残な、似ても似つかない代物なのだ。絵の具を使うと、もういけない。鉛筆で描いたデッサンはそこそこなのだが、絵の具を塗り始めた途端、そのデッサンが台無しになり、ただただ汚い色使いのべちゃべちゃした作品になってしまうのだ。

そんな私が小学校低学年の頃、一度だけ学校で表彰されたことがある。こんなことは後にも先にも一度だけだったので、その絵のことは良く覚えている。それは夏休みに山形の田舎を訪れた際の、緑の里山と田園風景をクレパスで描いたものだった。

ご存知の方も多いと思うが、クレパスはクレヨンより粘度が高いのでべたべたしている。私の描いた絵は、クレパスを重ね塗りして指でゴシゴシ画用紙にこすりつけ、緑の山々の深みを微妙な色合いで表現したものだった。表彰ですっかり気を良くした私は、その後も図画の時間のたびに同じ絵を描き、先生から呆れられ、たしなめられた。

あれから半世紀もの歳月を経た今、私は縁あって数年前から農業関係の仕事に従事している。まさにあの絵の世界に飛び込んだような仕事に関わることができたことは無上の喜びであり、かつ感慨深く思っている。緑の里山や田園

風景は日本人の心のふるさとだ。遥かいにしえの太古より、日本人は自然を敬い、自然と共生しながら、稲作を中心に農業を営んできたのだろう。

戦後、日本人は欧米文化の過剰摂取により、ずいぶん変わり果ててしまったような気がする。だが都会に住む我々は、誰もが田舎に旅をすれば、どこか心が休まり、里山や田園風景に郷愁を感じるだろう。これは日本人の心に共鳴する何かがあるからではないか。私たちはこの“心の中の何か”を決しておろそかにしてはいけないと思う。これを失ってしまったら、日本人が日本人でなくなってしまうのではないか。多くの国々が肩を寄せ合う欧州でもそれぞれの国の人々は、たとえわずかな差であっても彼らのアイデンティティをととても大切にしている。

ところで、昨今TPP参画の是非を巡り巷では様々な議論がなされている。だが今日までの政治の無為無策の果てに、時間ばかりが費やされ、日本の農業再生について、なかなか有効な手立てが見えてこない。大規模農業の振興に努め、次の世代の担い手を育て、待ったなしで農業分野の国際競争力強化を図るべきと思うが、現実の施策はそれに逆行するようで、違和感を禁じ得ない。

日本の農業や食文化をしっかりと守りながら、かつ貿易立国として、世界と折り合いをつけてゆく方策は必ずあると思うのだが、失われた時間はあまりにも大きい。これが将来高価な代償となって、跳ね返ってこなければ良いのだが。日本人が叡智を尽くして、世界に誇る里山や田園風景を、子々孫々まで残してゆくことを願ってやまない。これらの風景を、決して絵の中だけのものにしてはいけない。